

自己免疫検査

- 抗核抗体 (ANA)
- 直接クームス試験
- 犬リウマチ因子
- アセチルコリンレセプター抗体
- 犬咀嚼筋筋炎抗体

検査価格はp.72をご覧ください。

検査項目名	検査方法	検体量	保存方法	所要日数	参考基準値		単位
					犬	猫	
抗核抗体 (ANA)	IFA	血清, 血漿 0.2 ml		2~4	(-)		
直接クームス試験 ^{※1}	マイクロプレート法	EDTA全血 2.0 ml		~2	(-)		
犬リウマチ因子	スライド凝集反応	血清 0.3 ml	冷蔵	2~3	(-)		
抗核抗体/ 犬リウマチ因子セット		血清 0.5 ml		2~4			
アセチルコリンレセプター抗体	RIA	血清 0.5 ml	冷蔵 または 冷凍	7~14	0~0.6	0~0.3	nmol/L
犬咀嚼筋筋炎抗体	ELISA	血清 0.5 ml			(-)		

※1 検査結果に影響を及ぼす可能性があるため、検体は採血後翌日までに弊社に到着するようご依頼ください。なお、日数が超過した検体での検査は参考値としてご報告いたしますことをご了承ください。

注1 セットの場合、血漿検体での依頼はお受けできません。

検体採取証明書について

証明書の項目は、海外へ空輸しております。必ず依頼書の「検体採取証明書」欄にご署名（フルネーム）、ご捺印の上、ご依頼ください（p.8参照）。

検査説明および結果解釈

抗核抗体 (ANA) 検査

- 抗核抗体は細胞核成分に対する自己抗体であり免疫介在性疾患において陽性となります。
免疫介在性疾患…全身性紅斑性狼瘡 (SLE)、シェーグレン症候群、リウマチ様関節炎など
- 下記の疾患においても陽性となることがあり、診断の際には注意が必要です。
細菌性心内膜炎、糸状虫症、リケッチア感染、猫白血病 (FeLV)、猫伝染性腹膜炎 (FIP)、腫瘍がある場合
- ステロイド治療中の検体の場合、検査結果が偽陰性になる場合があります。

直接クームス試験

測定温度は37℃のため温式抗体のみ対象となります。
(+) : 赤血球膜上に抗赤血球抗体の存在が確認されました。
(-) : 抗赤血球抗体の存在が確認されませんでした。
ステロイド治療中の検体の場合、検査結果が偽陰性になる場合があります。

注1 EDTA全血をご用意ください。カルシウムキレート性抗凝固剤以外の場合、赤血球に補体が結合するため偽陽性になる場合があります。

注2 採血後は、凝固・溶血しないように、速やかに転倒混和してください。転倒混和は静かに行ってください。
検査では血球を使用するため、極度の溶血、凝固、凝集などにより、血球が必要量に満たない場合は検査を行うことができない場合があります。

ご依頼時の注意点

- 以下の場合ご依頼をお受けできない場合がございます。
指定の条件をみたしていない検体 • 検体材料 • 検体量 • 動物種 • 保存輸送の状態 • 採取日から弊社到着までの日数 など

注3 検体は採血後翌日までに弊社に到着するようにご依頼ください。

注4 必ず冷蔵宅配便をご利用ください。(冷凍不可)

犬リウマチ因子検査

- (+) : 犬リウマチ因子の存在が確認されました。
- (-) : 犬リウマチ因子の存在が確認されませんでした。

注1 血漿検体および乳びは偽陽性の原因になります。

アセチルコリンレセプター抗体 (Ach-R抗体) 検査

免疫沈降RIA法によって確認されるAch-R抗体価により、筋無力症の鑑別診断の補助として行います。

参考基準値以下……年齢、種別、性別に関わらず、この範囲で正常といえます。

参考基準値以上……筋無力症の可能性が示唆されます。

発症の初期および寛解期では、低値の場合があります。臨床徴候があり、低値の場合は再検査の実施が推奨されます。基準値以下でも筋無力症である症例もあります。また、抗体価を下げる可能性のあるコルチコステロイド療法を行う前の採血が推奨されます。

犬咀嚼筋筋炎抗体検査

血中の咀嚼筋2M型線維自己抗体を測定する検査です。

100倍未満 (<1:100) : 咀嚼筋筋炎抗体陰性です。免疫抑制量のステロイドを7-10日以上使用した場合、咀嚼筋筋炎末期の場合および多発性筋炎の場合には陰性になることが予想されます。必要に応じ筋生検を実施することが推奨されます。

100倍 (1:100) : 抗体価はボーダーラインです。咀嚼筋筋炎を確定するためには筋生検を実施することが推奨されます。

>100倍 (>1:100) : 咀嚼筋筋炎の診断が支持されます。